

「救い主の誕生」

エズラ記 第3章 1節～5節
マタイによる福音書 第1章 12節～17節

説教 岡村 恒牧師

「ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。」(16節)マタイによる福音書は、多くの名前を並べた後でこのように記します。聖書を読もうと決心して開き、この系図を見て不思議に思われた方もおられるでしょう。神はご自身の御心を明らかにしようとした時、何か他の言葉からではなく、この系図から語り始められました。

この系図を神の言葉として読む時、そこに私たちは神のメッセージを聞き取ります。「バビロンへ移されたのち」(12節)の系図を目にしています。今朝の系図には有名な人はほとんど登場しません。分かることは、不信仰の故に神の呪い(のろい)を受けた人がいることぐらいです。また、ヨセフに関して『イエスの父』とは記されず、母マリヤの名前が登場する点が特別だということも分かります。ヨセフは血のつながりによってではなく、法的にマリヤの夫として、この系図と主イエスとを結びつけています。神の救いの計画だけが、この人間の歴史に主イエスを突入させたのです。

「バビロンに移されたのち」というのは、イスラエルの国がバビロニア帝国によって滅ぼされた後、という話です。イスラエルがあった約束の地は、神に祝福された豊かな土地でした。交通の要衝でもあり、周辺の強大な国々によって繰り返し侵略されました。ダビデ王の後、神の民イスラエルは、神に信頼することができず、目の前の強大な国家に頼ろうとしました。そこで神は、バビロンという強国を用いて、イスラエルを攻め滅ぼさせたのです。今朝お読みしたエズラ記には、この『バビロン捕囚』から帰って来たイスラエルの民が、神殿を復興し、神との関係を再構築しようとした、そういう場面が描かれています。何とかして神を正しく礼拝し、祝福の約束を回復したいと願いながら、どうしても実現できない神の民の姿が描かれています。神はこの現実に対して、まことの救い主を送ると約束して下さいました。

今朝の系図の時代は、いわば神の民の信仰が枯れ果ててしまったような時代です。神に祈りを捧げながら、神の約束の実現を信じて待ち望むことができなくなった時代です。そしてこの姿は、今の私たちと重なります。『名もない人々』という言い方がありますが、聖書は、歴史に名を刻まれないような人々の名前を一つ一つ書き記

しながら、その先に、確かに神の救い主が到来したことを記します。人間の目には留まらず、名前さえ忘れ去れるような存在を、神はご覧になり、記録されます。神の目には、『名もない人々』など一人もいないのです。神は私たち一人一人をご覧になり、私たちの《罪》を問われるのです。終わりの日、神の前に立って裁かれます。誰ひとりこの裁きを免れることはできません。一人残らず神に名を覚えられ、罪を数え上げられ、裁かれる存在です。

しかし、この系図の先に神が用意して下さいしたのは、いや、この私の人生に神が実現して下さいしたのは、救い主イエス・キリストの誕生でした。神に逆らい、神無しに生きようとする私たちの罪の人生に、神のひとり子が到来して下さいました。一人として、神に忘れ去られ、罪を問われないことがないので、それぞれの人生に、救い主がおいでになったのです。

ルカによる福音書3章の系図は、主イエスからアダムにまでさかのぼり、創造以前にまでさかのぼる神の救いの計画を描きます。今朝の系図は、私たち人間の罪の歴史を克明に描き出し、そのただ中に主イエスがおいでになったことを明らかにします。その上で、主イエスの誕生の物語を語り始め、救い主の誕生が、今ここにいる私たち一人一人の人生に神が関わって下さった出来事であることを明らかにします。

この系図の最後に主イエスが登場しました。聖霊によって、私たちの罪の歴史の中に、神のひとり子、救い主が突入して下さいました。今日、終末聖日に私たちは神の恵みを数え上げ、神に感謝を捧げます。終わりの日に、神の前に立つ日のことを思い、与えられた恵みと祝福、何よりも、主イエス・キリストによって与えられた救いの恵みを感謝するからです。

主イエスの到来を感謝しつつ、《アドヴェント(待降節。本来の意味は到来)》を迎えます。主イエスが再び来て下さる日を心待ちにしながら、悔い改めつつこの時を過ごします。私たち一人一人の歴史、人生のただ中に、神の救いが到来しました。私たちは、主イエスの系図の中に自分自身の名前を発見します。そして終わりの日に読み上げられる《いのちの書》に自分自身の名前が記されていることを信じて、主を待ち望み、主の御名を讃美します。

(記 岡村 恒)